『麒麟閣』について
――隋唐物語と演劇

小松　謙

明から清にかけて、隋唐の歴史を扱った小説が多數刊行された。それらの小説は、それぞれ微妙に異なる内容を持つ。こうした現象が、藝能で語られていた物語と歴史書の間でどのような性格の書物を作り上げるかという個々の出版者の意圖のずれより生じたものであり、物語の内容の古さは必ずしも出版時期と合致しないことについては、様々な論者がすでに述べ、筆者もかつて論じたところである。[1]

戯曲『麒麟閣』は、こうした議論において重要な鍵を握る存在と見なされてきた。[2] 明末清初に活躍した蘇州派を代表する劇作家李玉（生沒年不詳だが、一六一〇年代に生まれ、一六七一年以降に沒したと思われる）の作とされるこの戯曲は、隋唐物語の多くの部分と重なる内容を持っており、明末清初段階における隋唐物語の狀態を示す貴重な資料と見なされてきたのである。だが、現存する『麒麟閣』のテキストには重大な問題が存在する。まずこのテキストの性格を明らかにしない限り、『麒麟閣』を隋唐物語について考察を加える材料として利用することは危險といわざるをえない。本論においては、『麒麟閣』の内容に詳しい檢討を加え、その性格を明らかにしたい。

一

『麒麟閣』は李玉の作品といわれる。その根據は、清の高奕が著した『新傳奇品』の「李玄玉（玄玉は李玉の字）」の項にその作品として「麒麟閣」の名が見え、『曲海總目提要』卷十九「麒麟閣」の項に「李元玉（康熙帝の諱を避けるため「元玉」に改めた）作」とあるほか、『傳奇彙考標目』・焦循『劇說』・梁廷枏『曲話』等にも李玉の作として「麒麟閣」の名があげられている點にある。これらの記述から考えて、李玉に『麒麟閣』という作品が存在したことは間違いあるまい。また、『曲海總目提要』に

演秦瓊麒麟閣圖形、與正史多不合。羅藝妻乃孟氏、今以爲秦瓊姑、尤屬悖謬。藝子羅成、亦係撮撰。

秦瓊が麒麟閣に肖像を描かれたことを演じるもので、正史とは一致しない點が多い。羅藝の妻は孟氏であるのに、ここで秦瓊の叔母としているのは、特に大きな誤りである。藝の子羅成もでっちあげたものである。

とある點からすれば、その内容は秦瓊（叔寶）と羅藝・羅成父子の登

場するものであり、羅藝の妻が秦瓊の叔母と設定されていたことも確かであろう。そして、以上の設定をすべて含む『麒麟閣』と題する傳奇が現存する以上、それが李玉の『麒麟閣』として認識されてきたのは當然のことであった。

しかし、同じ内容を含む同じ題名の作品であれば、完全に同一のものと見なしてよいものであろうか。この點には、再檢討の餘地が存在するのではないか。

現在目にすることができる『麒麟閣』のテキストは、『古本戲曲叢刊三集』に影印された上海圖書館藏の抄本である。郭英德編著『明清傳奇總錄』（河北教育出版社一九九七）卷四の本劇の説明によれば、この他中國社會科學院文學研究所圖書館に康熙十七年（一六七八）の抄本があり、また中國藝術研究院戲曲研究所資料室には清南府抄本が十三出のみ殘るというが、現在ともに見る便を得ないため、ここでは『古本戲曲叢刊三集』所收のテキストを對象として議論を進めたい。なお、以下の議論については、**附表**を參照されたい。

このテキストの性格については、周妙中氏が「各卷の前にはいずれも『提綱』があって、各出の登場人物と演者の姓名が書かれている。この種のやり方は、内府上演本と同じであり、この抄本は内府上演本、もしくは内府上演本を寫したものではないかと疑われる」と指摘し[3]、これを受けて千田大介氏が更に、「開場」の前に天界の場面を配する點が清朝宮廷大戲の形式と一致する點を指摘した上で、避諱や俳優の名前から考えて、道光年間の昇平署抄本であろうと推定しておられる[4]。兩氏の見解は首肯しうるものと思われる。實際、形式から見ても、二本からなることは數日を要して上演されるいわゆる連臺戲に屬することを意味し、やはり清朝宮廷大戲の性格に合致する。しかし、李玉が清朝宮廷演劇の脚本を書いていたという事實は知られていない。

そして、この長さは李玉の作品の中では例外的なのである。周氏が「私が目にした歷史傳奇の中で、歷史大戲を別にすれば、『麒麟閣』と董榕の『芝龕記』しか六十出に及ぶ長さのものはなく、他は通常いずれも三、四十出で、五十出あれば長い方になる」と述べておられるように、『麒麟閣』は通常の傳奇よりはるかに長く、全六十一齣に及ぶ。一方、李玉の他の作品は三十齣に滿たないものが多く、一番長いものでも三十二齣（『意中人』）に過ぎない。つまり、『麒麟閣』は他の李玉の作品のほぼ二倍の長さを持つことになる。

李玉は、蘇州派の代表として名高い明末清初を代表する劇作家である。蘇州派は、上流階級向けの劇種である崑山腔を使用しつつも、平明な言語を用いた比較的庶民的な作風で知られ、その作品は實演、それもおそらく個人の邸宅における堂會演劇よりは劇場（明代には常打ち小屋の存在は確認できないが、廟や寺院などで商業演劇の興行はあったようである）や野外舞臺における不特定多數を對象とした場における上演を想定しているものが多いように思われる。三十齣前後というのは、一日の上演用には好適な長さといえよう。

『麒麟閣』は通常の上演には適さない長さを持つ。現存する『麒麟閣』は本當に李玉の作品なのであろうか。しかも、『麒麟閣』の内容には多くの矛盾點が存在するのである。

二

『麒麟閣』は二本構成、第一本は三十三齣、第二本は二十八齣、合計六十一齣からなる。各本は更に卷上と卷下に分かれ、第一本卷上は

十八齣、巻下は十五齣、第二本巻上は十三齣、巻下は十五齣からなる。通常清朝宮廷演劇は一本が上下各十二齣の合計二十四齣からなるのを基本としており、この不揃いさはその原則から大きく外れるものである。

第一本の巻上においては、清朝宮廷演劇の通例である天界の場面の後、プロローグがあり、以下秦叔寶が出張先で單雄信・徐勣らと知り合った後、災難に遭い、燕に配流されて叔母とその夫である羅藝、そして従弟にあたる羅成に巡り會うことが演じられる。この段階までは、物語は一連の隋唐物の小説とほぼ合致する。

ここで、議論を進める上で問題となる隋唐物の小説を確認しておきたい。隋唐を題材とする小説は多數にのぼるが、『唐書志傳』などの歴史書に忠實な内容を持つものは『麒麟閣』との間に密接な關係は見出しがたいため、ここでは對象から除外する。そこで主たる問題になるのは、次の四篇である。

①『隋史遺文』（以下『隋史』と略稱）

十二卷六十回。崇禎六年（一六三三）の吉衣主人の序があり、おそらくこの號を名乘った明末清初の文人で、劇作家としても高名な袁于令の作と思われる。

②『隋唐演義』

二十卷百回。康熙三十四年（一六九五）の褚人獲序あり。作者は褚人獲と思われる。

③『説唐演義全傳』（以下『説唐』と略稱）

六十八回。乾隆元年（一七三六）如蓮居士の序あり。

以上の三種は秦叔寶を主人公とする點で共通する。これから問題にする箇所については、『隋唐演義』は『隋史』の本文と一致することが多いため、特に必要のある場合以外は『隋史』により代表させることとする。

④『大唐秦王詞話』

八卷六十四回。諸聖隣の作。萬曆三十五年（一六〇七）進士陸世科の序あり。「詞話」つまり齊言體のうたにより物語を語っていく藝能テキストであるが、地の文が多く、ほぼ小説と大差ない性格を持つ。この作品においては、秦叔寶らは讀者には周知のものの如く説明なしに登場し、その後に主役として尉遲敬德が詳しい説明を伴って現れる。

『麒麟閣』第一本上の内容は、『隋史』『隋唐演義』『説唐』の三篇に共通するストーリーとほぼ同じだが、三篇との合致の狀況は單純ではない。第一本上卷第十齣（以下「1上―10」という形で表記）において秦叔寶が誤って殺す相手の名「張奇」は『隋史』『隋唐演義』と合致し、『説唐』の「吳廣」とは異なる。ところが、續く1上―11で秦叔寶が一旦死罪を宣告され、1上―12で單雄信と徐勣がその知らせを聞き、1上―13で單雄信が袁天罡に訴えて減刑をかちとるという展開は、『説唐』にしかないものである。つまり、基本的には『説唐』と同じだが、一部『隋史』の方に合致していることになる。『隋史』が『説唐』に近い内容の先行作品を史實に合うように改作したものであることは、筆者が以前に論じた通りである。[5] そして『説唐』の刊行時期は『隋史』より格段に遲い。これらの事實から考えれば、『麒麟閣』の第一本上は『隋史』が基づいたもの、つまり『説唐』の原型と一致している可能性が高いことになるであろう。

第一本下になると、秦叔寶は叔母夫婦に別れを告げて山東に歸り（1下―1～3）、續いて秦叔寶の母の誕生日を祝うため友人たちが集

まるくだりになる（1下－4・5）。これは、續く長安の元宵節のくだりと順序が逆になっていることを除けば、『隋史』『說唐』のいずれとも內容的に大差ない。ただ、微妙な違いはある。まず山東で秦叔寶が仕える相手が『隋史』では總管來護兒、『說唐』では節度使唐璧であり、『麒麟閣』は『說唐』に合致する。また、『說唐』では誕生祝いに來るメンバーの中に羅藝によって派遣された羅成が含まれているのに對し、『隋史』では張公謹らのみである。この點では『麒麟閣』は『隋史』に合致する（張公謹の名は張公瑾と表記されている）。『隋史』は實在の人物ではない唐璧を史書に見える來護兒に改めたものと思われ、その他は『隋史』に一致するということは、やはり『隋史』が基づいた『說唐』の原型に依據している可能性が高いであろう。ここまでは、『麒麟閣』の內容には大きな矛盾がなく、ストーリーもほぼ一貫している。

ところが1下－6から、物語は突然それまでとは矛盾し、かつ小說とも合致しない傾向を示し始めるのである。1下－6の冒頭で登場した秦叔寶は、誕生祝いは終わったが、羅成・尤俊達・程咬金・齊國遠が殘っていると言う。前述の通り、1下－4・5においては羅成は來ていないことになっていたはずである。また小說においては、尤俊達と程咬金は誕生祝いの直後に公金を强奪しようとして捕らえられ（『隋史』では單なる公金、『說唐』では靠山王楊林の金。『隋史』が實在しない楊林を抹消したため異同が生じたものと思われる）、『說唐』においてはそれが大反山東へとつながるわけだが、ここでは二人は秦叔寶の上京に同行することになる。事柄の順序が異なることは前述の通りである。しかも、秦叔寶は登場するなり自己紹介して狀況說明を始めるのだが、これは他には初登場と卷上と卷下の切れ目という節目にしかないことである。

また、續く一同が上京して元宵節の夜に婦女暴行を働こうとする宇文公子を殺す物語の登場メンバーも、小說の秦叔寶・王伯當・齊國遠・李如珪・柴紹に對し、『麒麟閣』では秦叔寶・羅成・程咬金・尤俊達・齊國遠と大きく異なる。同行させてもらうため、羅成たちが秦叔寶が持っていた公文書を勝手に改變するという展開も小說にはない。また上京後の物語も、『隋史』『說唐』と大きくは異ならないものの、宇文公子の名が成德（小說では宇文化及の弟で宇文惠及。成德は、『說唐』の主要人物宇文成都と共通する文字を持つ點から考えて、おそらく成都の兄弟、つまり宇文化及の子と設定されているようである）であり、一同が逃れる方法が異なる（『隋史』では騷ぎにまぎれて脫出する。『說唐』では李靖からもらった五粒の豆を投げて、魔法により逃れる。『麒麟閣』では李靖にかくまわれて、李靖の配下に變裝して城門を出る）などの違いがあるが、一番大きいのは、暴行未遂の被害者王婉兒の扱いであろう。『隋史』『說唐』では王婉兒は暴行を受けた末に、息子の死に怒った公子の父宇文述によって殺されてしまうのだが、『麒麟閣』では救ってくれた羅成と將來を約束することになっているのである。そして、1下－10で脫出してから、燕に歸る羅成と別れた後、秦叔寶の「那魏公李密、獨霸金墉（ママ）、天下好漢歸附者甚衆（かの魏公李密は、金鏞城で霸を唱え、天下の好漢には身を寄せる者がとても多い）」という意見に從って、秦叔寶・程咬金・尤俊達・齊國遠の四人は金鏞城に據る李密のもとに投じる。この展開は、小說には存在しない。

ところが、續く1下－11になると、楊林の十二人の義子（太保）の十二番目にあたる賀芳が登場して、楊林が秦叔寶を招こうとしていると言って憤り、續いて十一太保の上官儀と楊林が登場、濟州の秦瓊が

勇猛なので配下に加えると言った後、秦叔寶が登場して楊林配下に加わり、虎翼將軍に任じられた上で、美女張紫烟を與えられる。つまり、前齣で山東に戻らずに金鏞城の李密のもとに投じたはずの秦叔寶が、ここでは山東濟州にいて、楊林の配下に入っているのである。これは明らかな矛盾であろう。この展開は『說唐』と概ね一致する（ただし楊林が秦叔寶の父の仇という『說唐』の設定は『麒麟閣』には見えない）。1下―12では、楊林・秦叔寶らが守る煬帝即位祝賀の財寶を程咬金・尤俊達が襲撃して捕らえられる。これも、二人は秦叔寶とともに李密のもとに赴いたという1下―10の設定とは完全に矛盾している。更に問題なのは、この時名を問われた二人が「程達・尤金」と名乗り、楊林が「又是程達・尤金」と言うことである。この後、秦叔寶も「此輩行劫、非止一次。前番長葉林、倒累小將代賠（こやつらが山賊行爲を働くのは、今回だけではありません。この前長葉林では、私が辨償するはめになりました）」と言う。

『說唐』では、秦母の誕生祝いの前に程咬金・尤俊達が楊林の祝賀の財寶を强奪し、守護していた楊林の義子盧方と薛亮が、程咬金が名乗った名前を「陳達・尤金」と聞き間違え、犯人逮捕を命じられながら果たせなかった秦叔寶が打たれることになっている（『隋史』は楊林の登場を缺くものの内容はほぼ同じ）。『麒麟閣』でもこの場面の前に長葉林のくだりがなければならないはずだが、その場面は存在しない。更に前述の通り、程・尤が捕らえられるのは、小說ではいずれも秦母の誕生祝いの直後になっている。

續く1下―13にも問題がある。ここで賀芳が大反山東の知らせを受けるのだが、謀反を起こしたのは程・尤のほかに、「外邊餘黨有李密・王伯當・羅士信等」であり、瓦崗寨に入ったと言うのである。ここで李密が出るのは『說唐』とは異なる（大反山東の展開は『隋史』にはない）。また、羅士信は秦叔寶の仲間で、若くして戰死した實在の人物であるが、『大唐秦王詞話』では羅成の字が士信とされており、『說唐』でもおそらく同一人物という設定になっているものと思われる。史實に忠實な『隋史』『隋唐演義』では、羅士信はかなり後になってから登場し、羅成とは別人とされた結果、後半羅成が宙に浮き、『隋唐演義』では木蘭傳說と結びつけて才子佳人小說風の展開が導入されることになるのだが、これは元來同一人物であった羅成と羅士信を無理に二つに分けた結果無理が生じたためであろう。『麒麟閣』で羅士信の名が出るのはこの部分のみである。

第一本の終わりで秦叔寶は楊林のもとから逃れて、瓦崗寨の一統に加わる。續く第二本は、2上―1で旗を拜して立てることのできた者が王となるという約束で一同が旗を拜し、結局程咬金が混世魔王となることから始まる。これは小說では『說唐』のみに見られる展開である。そして、續く2上―2では、李密（次齣で「金鏞魏王」と紹介される）が、楊林が布いた銅旗陣を破るため、「瓦崗寨五虎將秦瓊等」を借り受けようとする。これは李密と瓦崗寨が別の勢力であることを意味し、1下―10における秦叔寶たちが李密に身を寄せるという設定と矛盾することはもとより、李密が大反山東に參加していたという1下―13のセリフとも合致しない。2上―3で李密の依賴を聞いた程咬金は、李密になめられてはいけないと言って秦叔寶を派遣する。ところが2上―4では、楊林の使者が登場して、西魏王李密が金鏞で即位し、界牌關・滎陽關・虹霓關・臨陽關を破ったので、泗水關で楊林が八門金鎖陣を布き銅旗を立てたが、李密配下の大將が銅旗を倒しに來るので、羅藝に援軍を賴みに來たと述べ、續く羅藝が各地の情勢を聞

く部分では、李密が「拜徐世勣爲軍師」と言う。徐世勣とは徐勣、つまり徐茂公のことである。前の齣まで瓦崗寨の軍師だった徐茂公が李密配下とされていることになる。四つの關を破るのは、『說唐』では李密が瓦崗寨の主に迎えられ、名稱を金鏞城と改めた後のことになっている。

更に、續く2上－5で銅旗を倒すべく登場した秦叔寶は次のように言う。

俺秦瓊。自蒙李藥師指路逃生、卽與衆兄弟投入西秦王駕下、蒙他拜爲掛印先鋒。因聞泗水關設立銅旗、天下英雄束手無爲、因此俺奏過魏王、統領衆部將前來。

私は秦瓊です。李藥師（靖）の導きのおかげで脫出できた後、すぐに仲間たちと西秦王の配下に身を投じて、先鋒に任命していただきました。泗水關に銅旗を立てて、天下の英雄も手の出しようがないと聞きましたので、魏王に申し上げて、諸將を率いてやってまいりました。

「西秦王」というのが不可解であり、西魏王の誤りではないかと思われるが、ともあれこの記述が1下－10から直結するものであることは明らかであろう。つまり、秦叔寶は李密の部將として登場しているのであり、彼は瓦崗寨に身を置いたことはなく、元宵の騷ぎの後は、一貫して李密のもとにいたことになっているのである。

なぜこのような矛盾が生じたのであろうか。その點を論じる前に、『麒麟閣』の內容を最後まで檢討しておこう。

銅旗を倒した後、羅藝が命に背いて秦叔寶を助けた羅成を處刑しようとし、王婉兒と沙陀國公主靖璇飛に救出された羅成は秦叔寶のもとに逃れるという小說には全くない話があり（2上－7～9）、更に『說唐』にも見える揚州武擧の話へとつながる（2上－9～13）。2上－10で『說唐』のみに「隋朝第一條好漢」として現れる李元霸が、兄李世民とともに登場することは注意される。2上－11で王伯當・齊國遠・尤俊達とともに登場した秦叔寶は、「自從泗水關倒了銅旗、名揚寰宇、仍歸瓦崗寨與衆兄弟結聚、推程咬金爲王（泗水關で銅旗を倒して天下に名を轟かせた後、元通り瓦崗寨に歸って兄弟たちと團結し、程咬金を推して王とした）」と再び前と矛盾した發言をし、この後程咬金自身が乘り込んできて皆から「大王」と呼ばれている。揚州武擧の終わりである2上－13で再び靖璇飛が登場し、甘泉關を守るが、羅成の甘言に惑わされて關を開き、李元霸がその怪力で千斤の落とし戶を支えている間に、豪傑たちは脫出に成功する（『說唐』では雄闊海が支えて、最後に力盡きて死ぬ）。この後、羅成と靖璇飛についての後日談があるべきところであるが、『麒麟閣』の中では何も語られない。

揚州武擧で卷上は終わり、2下－1からは一轉して尉遲敬德の物語になる。以下、2下－13までは基本的に尉遲敬德の物語といってよい。ただ、秦叔寶の妻が柴紹の妻に巡り會う場面（2下－8）と、徐茂公が王世充のもとにいる秦叔寶を招く場面（2下－11）は秦叔寶を中心とする物語であり、秦叔寶と尉遲敬德が戰う場面（2下－12）もそれまでとは一轉して秦叔寶が主役、尉遲敬德は引き立て役になっている點は注意される。

卷下の全體的な性格をもっともよく示すのは2下－13であろう。單雄信が李世民を襲い、止めようとする徐茂公の袖を斷つが（割袍斷義）、驅けつけた尉遲敬德に敗れるという有名な場面である。李世民は逃れようとして谷を飛び越すが、後から單雄信と尉遲敬德も同樣に飛び越してついてくるという設定は、通常は尉遲敬德が李世民を追

い、秦叔寶がそれを救う場面のものである。更に、この齣の末尾で尉遲敬德は單雄信を殺してしまう。本來秦叔寶の見せ場であったものが尉遲敬德に振り替えられ、前半における主役の一人であった單雄信は、尉遲敬德を引き立てるただの仇役になっている。當然、『說唐』のクライマックスの一つである單雄信が單騎李世民の軍に斬り込みをかける場面は存在しない。

そして、最後の2下―14・15でとってつけたように秦叔寶の一家團圓が演じられて終わる。なお、各本の最初につけられた「提綱」によれば、2下―15は現行テキストの「團圓」ではなく「麟閣」と題され、秦叔寶・尉遲敬德・徐茂公と提宴官が登場することになっており、功臣の肖像を掲げる場である『麒麟閣』の名にふさわしく、三人の功績を讃えて終わるバージョンが存在したようである。

つまり卷下は、基本的に尉遲敬德の物語を語っており、基本的にその他の部分とは異質な內容を持つ。また、2下―12では秦叔寶が尉遲敬德に勝った後、劉文靜が尉遲敬德の主君劉武周の首を取ったことが報告され、この首で尉遲敬德を降參させようと李世民が言うところに、竇建德が羅藝を襲ったという報せが來て、秦叔寶が救援に出發する。ところが續く2下―13は、いきなり尉遲敬德がすでに降伏しているところから始まり、降伏に至るまでの詳細や、羅藝と秦叔寶のその後にはふれられない。

三

これまで見てきたように、『麒麟閣』には著しい矛盾と混亂が認められる。前に述べたように、李玉は非常に熟達した劇作家であった。彼の作品は實演を前提としているだけに、傳奇としては例外的に贅肉が少なく、伏線を効果的に用いるなど、構成にすぐれることで知られる。[6] 實際、李玉の作品が緊密な構成を持ち、演劇的効果に富むことは、『一捧雪』『永團圓』などの代表作を一見すれば明らかであろう。その彼が、このように矛盾だらけの冗長な戲曲を書くとは思えない。では李玉の作ではないのか。しかし、各種の曲の目錄は、いずれも『麒麟閣』を李玉の作とする。どのようにすればこれらの矛盾した狀況を說明することができるであろうか。

この問題を解く鍵は『麒麟閣』のテキストの性格にある。最初に述べたように、現存する『麒麟閣』のテキストは清朝宮廷演劇に由來するものと思われる。三國志を題材とする『鼎峙春秋』について筆者が論じたように、[7] 清朝宮廷で上演されていた大規模な連臺戲（上演に數日を要する演劇）は、複數の作品をつなぎ合わせて構成するのが常である。『鼎峙春秋』より規模こそ小さいものの、『麒麟閣』も同樣の性格を持つのではなかろうか。

このように考えれば、部位によって明らかな矛盾が認められることも問題なく說明できよう。隋唐物語は系統によって內容がかなり異なる。從って、複數の作品をつなぎ合わせると、どうしても矛盾が生じるのである。この點、ストーリーが大筋ではほぼ統一されている三國志とは事情が異なる。更に言えば、清朝宮廷大戲の中でも特に重要な作品と認められていた『鼎峙春秋』はかなり入念に制作されたはずであり、性格を異にする複數のバージョンが殘されていることは、[8] この劇が大幅に手を加えて再構成するに値するものと認められていたことを示すものであろう。實際、昇平署には三度にわたる通し上演（三度目は途中で終わってしまったようであるが）の記錄が殘されている。[9] それに對して、『麒麟閣』については上演記錄もなく（隋唐物折子戲の上演

記録はあるが、その内容は必ずしも『麒麟閣』と一致しない）、その重要性は『鼎峙春秋』に較べて格段に低かったものと思われる。従って、制作のしかたも多分に杜撰であった可能性が高い。

つまり、現存する『麒麟閣』は李玉の『麒麟閣』とイコールではないということになろう。しかしもとより無關係でもなく、おそらく現存する『麒麟閣』は、李玉の『麒麟閣』に他の作品を付け加えることによって、連臺戯としての體裁を整えたものと思われる。では、李玉が書いた本來の『麒麟閣』はどのようなものだったのであろうか。以下、本來の『麒麟閣』の姿をある程度復元するとともに、現存する『麒麟閣』（以下現『麒麟閣』と呼ぶ）の制作過程を割り出すことを試みてみたい。

ここで參考になるのは、冒頭であげた『曲海總目提要』の記事である。『曲海總目提要』の本文がいつ成立したものかは定かではないが、乾隆以前、あるいは康熙にさかのぼる可能性もあり、とりあえずここで言及されている『麒麟閣』は李玉の原作である可能性が高いであろう（以下李玉の『麒麟閣』を原『麒麟閣』と呼ぶ）。そこには、秦叔寶・羅藝夫妻・羅成のことが記されている。この點から考えれば、現『麒麟閣』の第一本卷上は、基本的に李玉の原作に基づいている可能性が高いであろう。事實、この部分については、話に大きな飛躍や矛盾はない。おそらくカットや改編もあまり施されていないのであろう。

では、第一本の卷下はどうであろうか。まず、秦叔寶が歸鄉する1下－3までの三齣は、李玉原作の續きと見てよい。1下－4・5の誕生祝いのくだりも續きかと思われるが、ト書きでそれまで「張璧」としていたものが「張公瑾」に變わること、單雄信が程咬金について程知節という名を使用することなどから考えると、確かなことは言えない。この位置にあるべき程咬金・尤俊達による長葉林での强奪事件については、原『麒麟閣』には存在したはずだが、この事件が起きてしまうとその搜索を秦叔寶が命じられるという展開になり、元宵節の物語を插入することができなくなるので、カットされたのであろう。

續く1下－6～10の長安の元宵節の物語は、すでに述べたように前後と全く矛盾した内容を持つ。李玉の原作がこのように矛盾していたとは考えられない。當然この部分は原『麒麟閣』以外の作品に由來すると考えるべきであろう。それは何であろうか。

幸い、この點は『曲海總目提要』から明らかにすることが可能である。同書卷三十に『鬧花燈』という傳奇が著錄されている。その紹介文の前半は大略次の通りである。

『麒麟閣』が秦瓊を主とするのに對し、『鬧花燈』は羅成を主とする。羅成は幽州の大將羅藝の子で、秦瓊は從兄にあたり、群盜王伯當・程咬金・李如珪・齊國遠と交わりを結んでいた。秦瓊は濟南の大將の配下におり、楊素に贈り物を届けることになる。文書には「一人」とあったのだが、ちょうど秦瓊を訪ねた羅成たちが、一緒に長安に燈籠見物に行きたいと考えて、「一」を「六」に書き換えた。やむなく同行を許した秦瓊が、長安で李靖に贈り物を届けると、李靖は書き換えを見破り、問題が起きたら自分の庭園に隱れるよう勸める。元宵の夜、宇文化及の子花花太歲が王婉兒をさらう。婉兒の母の訴えを聞いた羅成たちは、太歲を殺して婉兒を母に返し、李靖の庭園に逃れて地下室に隱れる。

文書の數字を書き換えること、王婉兒を救出すること、李靖の庭園に逃れること、いずれも小說とは異なり、現『麒麟閣』とはほぼ完全

に一致する。メンバーは、現『麒麟閣』では王伯當・李如珪の代わりに尤俊達が入っているが、羅成・程咬金という最も重要な人物については、やはり小説とは異なり、現『麒麟閣』とは合致している。王伯當は現『麒麟閣』では登場するもののほとんど見せ場がなく、李如珪は尉遲敬德に敗れる武將の一人として名が出る程度なので、登場人物のやりくりという至って技術的な理由から、他の部分で重要な役割を果たす尤俊達に差し替えた可能性が高かろう。

以上の諸點から考えて、この部分は原『麒麟閣』ではなく、『鬧花燈』の長安行きの部分（全部ではないかもしれない）をほぼそのまま插入したものと思われる。すると、1下―10で秦叔寶たちが李密のもとに身を投じるという展開も、『曲海總目提要』には明記されていないものの、『鬧花燈』の設定を引き継いでいる可能性が高いものと思われる。なお、『鬧花燈』の作者は不明であり、成立年代もわからない。

1下―11から、話は一轉して秦叔寶が楊林配下に入ること、程咬金・尤俊達が楊林に捕らえられることから、大反山東・三擋楊林という展開になり、第一本の終わりに至る。この部分については、基本的に原『麒麟閣』に基づくものと見てよい理由がある。1下―14・15が、『麒麟閣』と題して『綴白裘』に收錄されているのである。

『綴白裘』は、乾隆年間に逐次刊行された散齣集である。その第七集（乾隆三十六年〔一七七一〕刊）に、『麒麟閣』というくくりのもとに、1下―14「姬洩」が「激秦」という題で、1下―15「三擋」はそのままの題名で收錄されているのである。兩者には細かい異同があるものの、本文は概ね同じと言ってよい。無論現『麒麟閣』の成立時期が不明である以上、『綴白裘』が現『麒麟閣』からこれらの場面を抜き出したという可能性もあるようには見える。しかし、それを明確に否定する事實が存在するのである。

第一に、『綴白裘』の「三擋」の前には、現『麒麟閣』にはない楊林らによるセリフのやりとりが存在する。無論、折子戲として上演するため、わかりやすいように新たな場面を付け加えたということもありえなくはないが、どちらかといえば、連臺戲に仕立てるに當たって、長すぎる部分をカットしたと考える方が自然であろう。

それ以上に、『綴白裘』が基づいたものが現『麒麟閣』ではないことを示す明證がある。實は『綴白裘』第七集に『麒麟閣』と題して收められているのは「激秦」と「三擋」だけではない。その前に「反牢」という一段が存在するのである。ここは大反山東の發端、つまり程咬金と尤俊達が牢を破る場面で、牢番の柳周成（小說の柳周臣）が程咬金らと氣脈を通じて、付（副淨の略。道化役）の演じる典獄を醉わせておいて破獄するという展開だが、內容は付が俗曲である姑娘腔を唱うやや下品な笑劇的場面を主としており、宮廷演劇にふさわしくないため採用されなかったものと思われる。[10] 現『麒麟閣』にはないこの場面が收錄されていることは、『綴白裘』が現『麒麟閣』ではなく原『麒麟閣』もしくはそれに近いテキストに依據していることの證左であろう。つまり、1下―11から第一本の末尾までは、原『麒麟閣』に依據していることになる。そして、大反山東に李密が參加しているということは、『綴白裘』の「激秦」にも見えるのである（羅士信のことは出ない）。

では、第二本はどうであろうか。前述の通り、2上―2・3における李密から瓦崗寨への依賴という設定は、1下―10において秦叔寶・程咬金らが李密のもとに投じることと矛盾する。更にいえば、大反山

東に李密が加わっていたという原『麒麟閣』ともやはり矛盾しているのである。つまり、この部分は原『麒麟閣』ではありえない。一方、2上－5においては、秦叔寶は李藥師（李靖）に救われて兄弟たちと李密のもとに投じたと言っており、これは逆にすぐ前の2上－2・3とは完全に矛盾する一方で、1下－10とは完全に一致する。つまり、1下－6～10の『鬧花燈』由來の部分と2上－5は合致しており、1下－11～15（それにおそらくは2上－1もこれに含まれる）の原『麒麟閣』由來の部分はそれとは設定を異にする。そして、2上－2・3はそのいずれとも完全には合致しないことになる。

では、2上－2・3は何なのか。考えうる唯一の説明は、つじつま合わせであろう。第一本の最後の部分と2上－1で、秦叔寶は明らかに瓦崗寨に所屬し、混世魔王程咬金を主と仰いでいる。その秦叔寶が、銅旗陣では李密配下として登場せねばならない。そこで、李密が秦叔寶を借りるという強引な設定がなされたのであろう。しかし、細部まで修正するような丁寧なことは行われなかったため、明らかな矛盾が生じることになったに違いない。これは、現『麒麟閣』の制作がかなり杜撰に行われたことを意味するものである。

それでは、2上4～13の「倒銅旗」の物語もやはり『鬧花燈』に基づくのか。實はそうではないのである。先に引いた『曲海總目提要』の『鬧花燈』の項によれば、元宵の事件の後、話は楊陵（楊林のことであろう）が武擧を開いて程咬金・秦瓊・羅成を殺そうとすることに移り、三人が切り拔けた後、羅藝はこのことに怒って羅成を射殺しようとするが、隋を救援に來た花花公主が金鐃で矢を防いで救い出す。羅成は秦瓊らとともに唐の李靖のもとに身を投じ、羅成は金鐃公主を降して、王婉兒と金鐃公主をともに娶って夫人とするという、傳奇に多く見られる才子佳人小說風の結末に終わっている。

これは、大まかには現『麒麟閣』と似ているが、肝心の「倒銅旗」がないこと、公主の名が靖璇飛ではないことなど重要な部分で異なる。ということは、『鬧花燈』と同系統に屬する別のものに基づいているということになるであろう。それは何か。

同じ『曲海總目提要』卷三十には、その名も『倒銅旗』という傳奇が著錄されている。[11] 同書によれば、そのあらすじは次のようなものである。

秦瓊と程知節は王世充の配下として泗水關を攻める。楊琳は八門金鎖陣を布き、中に銅旗を立て、東方旺にそれを守らせるとともに、羅藝に救援を求める。羅藝は羅成を派遣するが、羅成は逆に秦瓊を助けて東方旺を殺し、銅旗を倒す。羅藝は羅成を斬ろうとするが、妻と諸將がとりなすので、竿に縛り付けて射殺することにする。以前羅成に救われた王婉兒母子は、ちょうど楊琳に呼ばれて救援に來た飛刀使いの沙陀國公主靜璇妃に哀願して羅成を救ってもらう。楊琳は武擧を開き、自身と宇文化及が試驗官になる。羅成は錢に射當てて狀元に、程知節は鐵の龍を持ち上げて榜眼になり、秦瓊は探花をねらって楊琳の部將左杰を倒す。怒った楊琳を羅成が落馬槍の技で刺す。靜璇妃が守る千斤閘（重さ千斤の扉）も羅成の頼みで開かれ、秦瓊が扉を支える間に皆は脫出し、李元霸が追っ手を退ける。唐建國後、李靖の上奏を受け、敕命で羅成は歸鄉の上靜璇妃と結婚、王婉兒は第二夫人となり、羅藝は靖邊侯に封じられる。

ほとんど現『麒麟閣』のストーリーと合致していることは明らかであろう。楊琳は楊林、靜璇妃は靖璇飛のことに違いない。違うのは秦

叔寳・程咬金が王世充の配下となっていることと、靜璇妃（靖璇飛）が飛鐃ではなく飛刀使いとなっていること程度である。更に、續く揚州武擧のくだりについても、『鬧花燈』ではなく『倒銅旗』の方が現『麒麟閣』と一致することは明らかである。特に、羅成・程咬金・秦叔寳が狀元・榜眼・探花（秦叔寳が探花を手にする前に戰いになってしまうが）になる事情が完全に一致していることは、現『麒麟閣』が『倒銅旗』に基づいている明證といえよう。

とすれば、靖璇飛・王婉兒と羅成の話が現『麒麟閣』では尻切れトンボになっていることも説明がつく。思わせぶりに登場した二人は、當然羅成と結ばれねばならないはずであるが、現『麒麟閣』にはそのような場面はなく、そもそも羅成自體が第二本卷下になると登場しなくなってしまう。李玉のように伏線を巧妙に用いる作家がこのようなことをするとは考えられない。これは『倒銅旗』の最後の部分を切り落として插入したことに由來するものであるに違いない。このように伏線が生きず、そのままになってしまう事例は『鼎峙春秋』にも認められるものであり、[12]さまざまな作品をつなぎ合わせて制作される清朝宮廷大戲においては一般的な現象といってよい。

そして、『倒銅旗』は『曲海總目提要』によれば「近時人作」である。前述の通り、この記述の時期は確定できないが、清朝中期、乾隆年間あたりではないかと思われる。つまり、現『麒麟閣』でもこの部分は成立が新しいことになる。

では、『倒銅旗』では王世充配下となっているはずの秦叔寳が、現『麒麟閣』の該當箇所ではなぜ初めは混世魔王程咬金配下、後では李密配下となっているのであろうか。『鬧花燈』と『倒銅旗』は、一部の人名と設定こそ異なるものの、基本的には同一の話といって差し支えない。花花公主は、本來一般名詞である「花花公子」が宇文成德に對して固有名詞のように用いられているのと同樣、靖璇飛の別名と考えられよう。羅成が父に處刑されそうになるのが『鬧花燈』では揚州武擧の結果となっているのは、長くなりすぎないよう「倒銅旗」の部分をカットしたためであろう。とすれば、『鬧花燈』に從えば秦叔寳・程咬金らは李密のもとにいなければならない。秦叔寳が王世充配下というのは、後に尉遲敬德に對抗するため、徐茂公が王世充に身を寄せていた秦叔寳を迎えに行く設定とは合致するが、秦叔寳が王世充のために戰うという設定になっている事例はない。『曲海總目提要』の誤りか、あるいはここで更に王世充配下という設定まで盛り込むと收拾がつかなくなると考えた現『麒麟閣』編集者の改變に由來するものかもしれない。揚州武擧の前に當たる2上—10では、李世民・李元霸の兄弟は王世充を討ちに行くと稱して登場しており、秦叔寳たちが王世充配下とすると、かなり話に無理が生じてくる。その點から考えれば、『曲海總目提要』の誤りである可能性の方が高いかもしれない。

揚州武擧の場面にも混亂が見られる。ここで登場する秦叔寳は、再び混世魔王程咬金配下と稱し、その後に混世魔王としての程咬金が自ら登場するのである。これは、あるいは原『麒麟閣』に依據する部分とつじつまを合わせるために付け加えられたものかもしれないが、確かなことは言えない。

續く第二本卷下は一變して尉遲敬德の物語になる。もとより尉遲敬德が秦叔寳の好敵手である以上、秦叔寳を主役とする『麒麟閣』に尉遲敬德を主役とする場面があってもよいわけではあるが、延々と尉遲敬德の物語だけが續くのは不自然であろう。とはいえ、原『麒麟閣』にも尉遲敬德を主役とする場面が存在したことは間違いない。『綴白

裘』六集（乾隆三十五年〔一七七〇〕序）に「麒麟閣」と題して「揚兵」という尉遲敬德の一人舞臺の短い一段が收錄されており、これは現『麒麟閣』2下―22「揚兵」とほぼ同一のものである。ということは、原『麒麟閣』でも尉遲敬德の物語は演じられていたのであろうか。

實は、『綴白裘』に「揚兵」が收錄されているという事實こそが、原『麒麟閣』には尉遲敬德の長い物語が存在しなかったことを示しているのである。「揚兵」において、尉遲敬德は登場するなり、「自家覆姓尉遲名恭、字敬德、乃朔州善陽人也。力擒虎豹、氣吐虹霓……」と自己紹介を始め（この部分は『綴白裘』・現『麒麟閣』とも同文）、續いてこれまでの戰いの様子を說明し、勇ましい內容の【甘州歌】（現『麒麟閣』では【八聲甘州】）を唱うと、たちまち退場してしまう。ここで唱われている內容は、現『麒麟閣』においてはここまでの場面で演じられてきたものばかりであり、かなり前からずっと主役を務めている人物が突然自己紹介をするのも不自然であろう。つまり、現『麒麟閣』におけるこの場面は浮いているのである。

傳奇においては、こうした短い場面は通常はそれほど重要でない人物、たとえば戰いの敵役などを紹介するだけのために使用されるものである。つまり原『麒麟閣』においては、この場面は尉遲敬德を新たな登場人物として紹介するために置かれていたものであったに違いない。現『麒麟閣』では、原型に存在する場面を流用しようとしてそれを導入したために不自然になってしまったのであろう。從って、2下―22以外の尉遲敬德の物語は、原『麒麟閣』には存在しなかった可能性が高いことになる。

では、この部分は何に基づいているのであろうか。これについては推測の域を出ないが、やはり『曲海總目提要』卷三十七に著錄されている『投唐記』かもしれない。梗概によれば、この劇はほぼ『大唐秦王詞話』の內容と合致するようであり、現『麒麟閣』における尉遲敬德の履歷がほぼ『大唐秦王詞話』と同じである點から考えて、その可能性は高そうに思われるが、尉遲敬德の履歷自體はよく知られたものであるだけに、斷言はできない。このように、第二本卷下は基本的に他の傳奇（『投唐記』？）に基づいているものと思われる。ただし、前述の通り、徐茂公が王世充のもとにいる秦叔寶を招く場面（2下―11）と秦叔寶と尉遲敬德が戰う場面（2下―12）は秦叔寶を主役としており、これらの場面は原『麒麟閣』によっている可能性が高いであろう。そして、2下―12末尾で秦叔寶は羅藝のもとに赴くことになっており、原『麒麟閣』ではこの後羅藝夫婦と再會する場面があった可能性がある。一方、2下―13で前半の準主役であった單雄信が登場するものの、敵役として終始してあっさり殺されてしまうのは、少し前の原『麒麟閣』由來かと思われる2下―11において、單雄信が第一本同樣の友情に厚い人物として登場することと考え合わせると、やはりこの部分が原『麒麟閣』とは性格を異にする物語に基づいていることを示唆するもののように思われる。

四

以上見てきたように、現『麒麟閣』は李玉の原作とは別のものと言ってよい。正確に言えば、李玉の『麒麟閣』をベースに、他の傳奇を付け足して制作されたものと思われる。そのことは、內容のみならず、形式からも見て取れる。

傳奇においては、各齣の末尾に通常四句、場合によっては二句の詩句が置かれ、それを登場人物が一般的には交互に唱えるのが定例であ

る。ところが現『麒麟閣』を見ると、この詩句がない齣の方がむしろ多い。そして、詩句が存在する齣の分布を確認すると、興味深い傾向が認められるのである。プロローグ以外はすべて原『麒麟閣』由來と思われる第一本巻上は十八齣中十一と、詩句を有する齣の方が多く、プロローグの二齣（ともに詩句なし）を除外すれば十六齣中十一となる。巻下は十五齣中五齣に過ぎないが、原『麒麟閣』由來と推定される八齣に限っていえばそのうち四齣となる。ほとんど原『麒麟閣』とは無關係と思われる第二本巻上では、詩句を有するのは十三齣中一齣に過ぎない。そして、巻下では十五齣中二齣、いずれも原『麒麟閣』由來かと推定される齣である。

間違いなく李玉の作であり、原型通りのテキストを傳えているものと思われるいわゆる「一人永占」、『一捧雪』『人獸關』『永團圓』『占花魁』を通見するに、詩を伴わないのが原則である家門（プロローグ）を除外すれば、齣末の詩を缺くのは全百十二齣のうち二十三齣に過ぎない。しかもその多くは、最後の曲が複數の人物により唱われるという詩の代用品である場合や、登場人物が一人しかいない時、あるいは主役以外の多數の人間が一度に退場していく場面など、詩を用いる必要がない、あるいは演出上用いるにふさわしくない狀況である。つまり、李玉は基本的に齣末には詩を置くのが定式であると考えていたと見てよい。そして、現『麒麟閣』において詩がある部分は、ほとんど原『麒麟閣』由來の部分と一致しているのである。

では、原『麒麟閣』はどのようなものだったのであろうか。第一本上巻はほぼ原『麒麟閣』に基づいており、内容にも矛盾や飛躍があまりない點から考えて、削除も少ないものと思われる。つまり、まず『說唐』や『隋史』同樣の秦叔寶が幽州に配流され、羅藝一家と知り合って歸ってくる物語が演じられていたのであろう。その後には秦母の誕生祝いが續いていた可能性が高いものと思われるが定かではない。ただ、現『麒麟閣』には存在しない程咬金・尤俊達が長葉林で楊林の財寶を强奪する場面はあったに違いない。それを受けて、現『麒麟閣』1下－11以下の、秦叔寶が楊林の太保となり、程・尤が捕らえられ、大反山東へとつながる物語が續いたであろう。『說唐』に見られる楊林が秦叔寶の父の仇という設定の有無は不明である。大反山東には、李密、それにおそらくは羅成も參加していたであろう。その後が、混世魔王程咬金を王とする瓦崗寨の話だったか、それとも李密を主とする金鏞城の話だったかは不明だが、李玉の作品の通常の長さから考えて、ここまでですでに二十齣程度に達している以上、その部分が詳しく演じられたとは考えにくい。おそらく、すぐに話が飛んで尉遲敬德の登場、徐茂公による秦叔寶の招聘、尉遲敬德を降して、秦氏一家が團圓し、皇帝から褒賞を受けるという結末で終わっていた可能性が高い。

この推定が正しいとすれば、秦叔寶物語の前半は確かに李玉『麒麟閣』の内容と合致するといってよいが、その後の鬧花燈・倒銅旗・揚州武擧などの物語はおそらく原『麒麟閣』には含まれていなかったことになる。このうち、鬧花燈は『隋史』にも見える以上、明末には存在したことは間違いないが、その他の部分については、明末清初に存在したと斷定することはできない。從って、以前に筆者が論じたように、『說唐』は刊行年代こそ遲れるものの、『隋史』『隋唐演義』のもとになった物語を保存しているものと思われるが、その範圍については、とりあえず確定しうるのは大反山東あたりまでと考えざるをない。その後の倒銅旗や揚州武擧の物語については乾隆頃には存在した

と言える程度であり、まして、その間に置かれている伍雲召・裴元慶・尚師徒らの物語の成立時期については、不明としか言いようがない。[13] 更に言えば、『隋史』ではすでに備わっている鬧花燈の物語にしても、羅成に關わる才子佳人物語の要素が導入されて變貌しているようである。『隋唐演義』で羅成に關わる全く別の才子佳人物語が導入されていることともあわせて、異なった類型の物語が導入されて生じる變化の過程や、羅士信との關わりから羅成の人物像がいかに變貌していくかなどについても考える必要があろう。

白話文學作品は、藝能の場や商業出版と密接な關わりを持つため、時として思いもかけない變貌を遂げることがある。こうした狀況は、演劇作品にのみ認められるものではない。白話小說もしばしば類似した複雜な經緯をたどって變化していく。そして、演劇作品や藝能テキストと白話小說の間にも、複雜な影響關係が存在する。明代以降、出版業の介在や文字資料の增加によって、こうした物語生成の場が、生の姿で文字の世界に現れることとなった。ジャンルにとらわれず精密に分析することにより、物語がいかに生まれ、展開し、今日知られる姿となったかを明らかにし、そこから物語とは何かを解明することが可能になるであろう。

注

（1）小松謙『中國歷史小說研究』（汲古書院二〇〇一）第五章「『唐書志傳』『隋唐兩朝史傳』『大唐秦王詞話』『隋史遺文』『隋唐演義』」（初出は「隋唐をめぐる講史小說の展開について」〔『中國古典小說研究』第一號（一九九五年六月）〕）。

（2）千田大介「李玉の歷史故事傳奇と乾隆期英雄傳奇小說〜『麒麟閣』と興唐故事小說とを中心に」（『中國古典小說研究』第一號〔一九九五年六月〕）・氏岡眞士「李玉の傳奇と明清小說—『風雲會』の周邊（『人文科學論集（文化コミュニケーション學科編〔信州大學〕）』三十三〔一九九九年三月〕）。

（3）周妙中『清代戲曲史』（中州古籍出版社一九八七）第一章「清朝初年的戲曲」「李玉」の項。

（4）注(2)所引の千田論文。

（5）注(1)に同じ。

（6）陳古虞・陳多・馬聖貴『李玉戲曲集』（上海古籍書店二〇〇四）「前言」など。

（7）小松謙「清朝宮廷大戲『鼎峙春秋』について—清朝宮廷における三國志劇」（『中國文學報』第八十一册〔二〇一一年十月〕）。

（8）小松謙「『鼎峙春秋』の古本戲曲叢刊九集本と北平圖書館本の關係について」（未發表。磯部彰編『清朝宮廷演劇文化の研究』掲載予定）。

（9）王芷章編『清昇平署志略』（商務印書館一九三五。二〇〇六年の商務印書館文庫本による）第四章「分制」。

（10）姑娘腔は山東の民間歌謠であり、蘇州の李玉の作品に見えるのは不自然にも思われるが、道化役である付についてはアドリブでうたやセリフを入れることを認めるのが常であり、上演を前提とした李玉の作品には「隨意……介」という書きが隨所に見える。『綴白裘』所收のテキストは姑娘腔を用いた上演用バージョンであろう。

（11）吳新雷主編『中國昆劇大辭典』（南京大學出版社二〇〇二）に『倒銅旗』の項目があり、李玉の『麒麟閣』が長すぎるため、昆曲の藝人が「秦瓊拔銅旗」のくだりを抜き出したものとして說明し、昇平署舊抄本に「拜旗」から「賺關」までが現存し、それが『麒麟閣』第二本上第一出から第十三出に該當するとして、これが『曲海總目提要』に見え

るものと同じだとする。しかし、『曲海總目提要』は程咬金拜旗などにはふれず、秦叔寶が程咬金配下で李密に貸し出されたともしないこと、本論で論じるように、この部分の内容が前後と大きく矛盾していることから考えて、やはり『倒銅旗』は原『麒麟閣』にはなかったと見るべきであろう。元來の『倒銅旗』にはなかったはずの「拜旗」などが含まれることから考えて、昇平署舊抄本は、現『麒麟閣』から元來『倒銅旗』に含まれていたであろう部分を中心に抜き出したものであろうと思われる。このテキストは現在見る便を得ないが、東京大學東洋文化研究所所藏の抄本（黄仕忠等編『日本所藏稀見中國戲曲文獻叢刊』〔廣西師範大學出版社二〇〇六〕第一輯第三册所收）・臺灣中央研究院傅斯年圖書館所藏の五種の抄本（『俗文學叢刊』〔新文豐出版公司二〇〇二〕第一輯第六十五册所收）・首都圖書館編『清車王府藏曲本』（學苑出版社二〇〇一）十三所收の抄本を検討したところ、いずれも『麒麟閣』2上－4「看報」から2上－8「郊壇」の間のみ（多くは2上－5「倒旗」のみ）を扱っていること、東洋文化研究所本はほぼ『麒麟閣』と同一の本文を持つが、他はそれぞれある程度本文が變化しており、特に傅斯年圖書館藏本のうち最長のものは、『說唐』に内容が合致するように、かなり強引な變更が加えられていることが明らかとなった。『倒銅旗』は、オリジナルのものは失われ、その一部分がさまざまな變更を加えた形で受け繼がれていったものと思われる。

(12) 注(7)に同じ。蔡文姬の召使たちがその後登場しないことなど。

(13) 『說唐』のこれらの部分が前半とは來歴を異にするであろうことについては、藤川絵里「隋唐もの歴史小說の一考察」（『和漢語文研究』第2號〔二〇〇四年十一月〕）參照。

（付記）

本論文は、平成二十五年度科學研究費助成事業・基盤研究（C）課題番號二五三七〇四〇一「元・明・清における演劇と白話小說の關係に關する研究」の成果である。

また、本論文執筆にあたって、大阪市立大學の松浦恆雄氏に資料の提供などの便宜をおはかりいただいた。ここに記して、感謝の意を表させていただきたい。

附表（「回末の詩」の○は四句、△は二句あることを示す）

齣	題	內容	曲牌	曲種	韻	登場人物（脇役は除く）	系統	由來	回末の詩	備考
1上－1	降凡	玉帝命衆星下凡	新水令・雁兒落・得勝令・掛玉鈎・七弟兄・梅花酒	北曲套	方象蒼	玉帝・昭容・左輔・右弼・天蓬・黑煞・青龍・白虎・紫微星		清朝宮廷		
1上－2	開場	家門	六言十句	六言	扶胡謨			清朝宮廷？		
1上－3	友餞	尤程餞秦樊	瑞鶴仙・刷子芙蓉・玉芙蓉・普天錦・尾		表少草	秦瓊・樊建威・尤俊達・程咬金	說唐・隋史	麒麟閣	○	程咬金が尤俊達の家に行く
1上－4	遣魏	楊廣謀襲李淵	引×2・四邊靜		豹到報	楊廣・魏文通	說唐	麒麟閣	△	魏文通後に登場せず
1上－5	臨潼	秦瓊救李淵	出隊滴溜子・新水令・步步嬌・折桂令・江兒水・雁兒落帶得勝令・僥僥令・收江南・園林好・沽美酒帶太平令・尾	北曲套	越血碣	李淵・秦瓊・楊廣・單雄忠・樊建威	說唐・隋史	麒麟閣	○	提綱には魏文通の名があるが、登場せず
1上－6	怒歸	單雄信憤李淵	引・三學士・鷓鴣天・三學士		許都書／霄號高	徐勣・單雄信	說唐・隋史	麒麟閣	○	鷓鴣天のみ別韻
1上－7	賣馬	秦瓊賣馬	粉孩兒・福馬郎・紅芍藥・耍孩兒・會河陽・縷縷金・越恁好・尾		走侯九	秦瓊・單雄信	說唐・隋史	麒麟閣	○	馬の名は忽雷馭
1上－8	跌廟	徐勣救秦瓊	山坡羊・五更轉・玉交枝×2・玉山供・尾		望颺丈	秦瓊・徐勣・單雄信	說唐・隋史	麒麟閣	○	
1上－9	送米	程咬金負米訪秦家	引・九迴腸・一封羅×2		景影省	寧氏・張氏・程咬金・樊建威		麒麟閣	○	
1上－10	誤傷	秦瓊誤傷張奇	六么令引・皂羅袍・好姐姐		陣門郡	張奇・秦瓊	隋史	麒麟閣	○	張奇、說唐は吳廣
1上－11	審問	蔡清審問秦瓊	引・啄木兒・三段子・歸朝歡		狀光鄉	蔡清・金甲・童環・秦瓊	說唐	麒麟閣	○	蔡清、提綱では蔡勳。說唐は蔡建德
1上－12	報信	單徐聞信	引・不是路・排歌・一封書		繫期契	徐勣・單雄信・童環	說唐	麒麟閣		
1上－13	辯冤	單雄信控訴袁天罡	引・玉芙蓉・紅衲襖・尾		光章方／梟盜到	袁天罡・單雄信	說唐	麒麟閣		この展開說唐のみ・開皇二年辛丑科（辛丑は開皇元年）・紅衲襖から換韻
1上－14	起解	秦瓊起解	哭相思・引・憶多嬌×2・鬥黑麻×2		織滴夕國	童環・單雄信・秦瓊・徐勣	說唐・隋史	麒麟閣		童環の自己紹介あり・哭相思と引は別韻・入聲韻だがパターン不明
1上－15	落店	秦瓊赴擂臺	引・甘州歌		丈廣上	張璧・童環・秦瓊	說唐・隋史	麒麟閣	△	張公瑾の諱は璧
1上－16	擂臺	秦瓊打擂臺	粉蝶兒・剔銀燈×4・尾		强讓鄉	張璧・史大奈・詹必勝・童環・秦瓊	說唐・隋史	麒麟閣		前齣と同韻・史大奈に勝ってしまう

1上－17	轅門	兩尉遲等商量兎棒計	引×４・園林好・江兒水・玉交枝・五供養・川撥棹・尾		霓飛羆	尉遲北・尉遲南・薛彪・秦瓊・童環・杜環	說唐・隋史	麒麟閣		薛彪と杜環は他に見えず。鐵面四天王と朱家兄弟も。羅德は說唐後傳に登場・誕生日のこと小說になし
1上－18	見姑	秦瓊燕山見姑	杏花天・引・小桃紅・下山虎・引・山麻稽・五韻美・蠻牌令・五般宜・江頭送別・江神子・尾		老袍韜	羅藝・杜環・秦氏・羅成・張璧・秦瓊	說唐・隋史	麒麟閣	○	羅藝の號は燕山・小說とは少し展開異なる・敎場鬪武のくだりなし
1下－1	換鐧	秦瓊題詩	步蟾宮・宜春令×３・鎖南枝×２		受宥囚	秦瓊・羅成・羅藝	說唐	麒麟閣		鎖南枝による二十四般鐧法と三十六路槍法の列擧あり。この設定は說唐のみ・唐璧に紹介は說唐に同じ。隋史と隋唐では紹介先は來護兒
1下－2	辭姑	秦瓊辭姑	引×２・園林好・江兒水・川撥棹・尾		久留愁	羅藝・夫人（秦氏）・羅春・秦瓊・羅成	說唐	麒麟閣		
1下－3	回家	秦瓊回家	引・賺・皂角兒・尾		怏方堂	秦母・張氏・秦瓊	說唐・隋史	麒麟閣	○	
1下－4	途會	諸人赴祝壽	引・縷縷金×６・尾		霄飽笑	單雄信・徐勣・柴紹・尤俊達・程咬金・張公瑾・王伯當・齊國遠	隋史	麒麟閣？		小說はいずれも鬧花燈の後・ト書き、張璧から張公瑾に。說唐では羅藝の使者は羅成で張以下が隨行・李淵の使者は柴紹・單雄信が程知節と言う
1下－5	上壽	諸人與秦母慶壽	引×２・梁州新郎・引・梁州新郎・節節高・尾		茅孝繞	秦瓊・秦母・張氏・賈潤甫・單雄信・徐勣・柴紹・尤俊達・程咬金・張公瑾・王伯當・齊國遠	隋史	麒麟閣？		
1下－6	改文	羅尤程齊改文隨秦瓊	卜算子・引・不是路×２・皂角兒×２・尾		怠賽海	秦瓊・羅成・尤俊達・程咬金・齊國遠		鬧花燈		張公瑾が祝いに來たはずなのに羅成になっており（說唐に一致）、單雄信・徐勣も見えない。羅成以下の四人が改めて自己紹介。程・尤が登場するも、楊林の銀を奪うことなし（小說では鬧花燈は誕生祝いの前）・メンバーは小說では王伯當・齊國遠・李如珪・柴紹。曲海が紹介する鬧花燈では羅成・王伯當・程咬金・李如珪・齊國遠と本劇にやや近い。文書を改めるのも同劇の展開に同じ
1下－7	餽送	李靖受禮物戒秦瓊	女臨江・懶畫眉・太師引×２		遇珠胥	李靖・秦瓊	說唐・隋史	鬧花燈	△	鬧花燈に同じ。逃れる方法は四句の隱語（說唐とは異なる）
1下－8	玩燈	宇文成德搶王婉兒	水底魚・一剪梅・步步嬌×２・水底魚・風入松×２・急三鎗・風入松・急三鎗・風入松		光央張	老嫗（陸氏）・王婉兒・羅成・尤俊達・程咬金・齊國遠・秦瓊・宇文成德	說唐・隋史	鬧花燈		公子の名は成德。成都との關係から見て宇文化及の子か。小說では惠及で宇文述の子
1下－9	鬧府	五雄打死宇文成德	出隊子・泣顏回×２・千秋歲・越恁好・紅綉鞋・尾		皎喬宵	宇文成德・王婉兒・老嫗・羅成・尤俊達・程咬金・齊國遠・秦瓊・李靖	說唐・隋史	鬧花燈		宇文成德、吳語を使用・羅成、王婉兒と婚約・李靖は家將に紛れ込ませて救う。鬧花燈では地下室に隱れたまま揚州武擧に續くらしい

1下－10	出關	李靖救五雄出關	甘州歌×2		面軟田	羅成・尤俊達・程咬金・齊國遠・秦瓊・李靖	秦王詞話？	鬧花燈？		羅成は河北に歸り、四人は金墉の李密に投じる（2上－5につながる）。この展開は大唐秦王詞話につながる
1下－11	徵聘	楊林聘秦瓊	引×2・桂枝香×2・排歌・尾		王壯煌	賀芳・上官儀・楊林・秦瓊・張紫烟	說唐	麒麟閣	○	秦瓊は楊林の十三太保になっている（前齣と矛盾。說唐の展開）・程尤が楊林の賀禮を奪ったこと（長葉林）に言及・楊林が秦瓊の仇であること見えず・賀芳は說唐に見えず（盧方は登場）、上官儀は說唐三傳に登場
1下－12	醉劫	程尤劫楊林	六么令×3・五馬江兒水・五供養×2・尾		箭鞭傳	尤俊達・程咬金・秦瓊・楊林・賀芳	說唐	麒麟閣		又是程達尤金とあり。長葉林の存在が前提
1下－13	報反	賀芳聞山東反報	雙勸酒・江兒水・玉交枝	入聲韻踏まず	落套却	賀芳・上官儀・楊林	說唐	麒麟閣	△	入聲韻ではない・大反山東、メンバーは程・尤のほか李密・王伯當・羅士信。李密は1下－10と矛盾。羅士信も問題
1下－14	姬洩	張紫烟殉秦瓊	鎖南枝×4・撲燈蛾		口喬苗	張紫烟・秦瓊	說唐？	麒麟閣	△	綴白裘7に『麒麟閣』としてあり・救うのは張紫烟。說唐では尙義明
1下－15	三擋	秦瓊擋楊林脫身	醉花陰・畫眉序・喜遷鶯・滴滴金・刮地風・鮑老催・四門子・雙聲子・水仙子・尾	北曲套・入聲韻踏まず	壘里迴	秦瓊・上官儀・賀芳・楊林・程咬金	說唐	麒麟閣		綴白裘7に『麒麟閣』としてあり・父の仇との設定なく、逃亡はあくまで讒言のため・「三擋」具體的になし。魏文通登場せず、救うのは王伯當ではなく程咬金・行き先は瓦崗寨
2上－1	拜旗	程咬金拜旗當王	引×3・園林好×2・江兒水・五供養犯・川撥棹×2		繞淆曹	魏徵・徐勣・單雄信・秦瓊・魯明月？・王伯當・柴紹・齊國遠・尤俊達・程咬金	說唐			前齣を受けるか。魏徵はここで初登場
2上－2	借兵	李密寄書求援	引・駐馬聽・尾		驟州猷	李密		（銅旗陣）		李密、銅旗陣に對して瓦崗寨から五虎將を借りようと言う。1下－13で李密が大反山東に參加していることと矛盾。また1下－10で秦瓊らが李密に身を投じたこととも別の意味で矛盾・說唐に卽して言えばここでかなり話が飛ぶ・ここから銅旗陣かと思われるが、2上－5から見ると、2上－2・3は2上－1までと銅旗陣を接續するため無理に設定された場面か
2上－3	遣助	程咬金遣秦瓊拔旗	點絳唇×2・泣顏回×2・千秋歲・尾		崗壯降	徐勣・程咬金・秦瓊その他		（銅旗陣）		金鏞魏王李密の使者→やはり瓦崗寨と金鏞城のつじつまあわせ？
2上－4	看報	羅藝遣羅成助銅旗	六么令・錦纏道・普天樂・古輪臺・尾聲		演旋延／狐烏誤	羅藝・羅成		銅旗陣		西魏王李密が界牌關・滎陽關・虹霓關・臨陽關を破ったと言い（說唐では李密の配下で秦瓊たちが破る）、泗水關で楊林が八門金鎖陣を布いて銅旗を東方旺に守らせる。說唐では陣を布くのは楊義臣で、楊林が一字長蛇陣を布くことは前にあり（本劇にない部分で、やはり羅成が密かに助太刀。水增しか）。・六么令のみ別韻・李密は徐世勣を軍師に「天下好漢盡入金鏞……」。前と矛盾し、1下－10には合致。ここから倒銅旗？

2上－5	倒旗	秦瓊三鋼倒銅旗	點絳唇・引・醉花陰・畫眉序・喜遷鶯・畫眉序・出隊子・滴溜子・四門子・鮑老催・水仙子・雙聲子・煞尾	南北合套・入聲韻踏まず	遁縱鋒	東方旺・羅成・秦瓊		銅旗陣		秦瓊、李藥師に救われて兄弟たちと李密に投じたと言う→1下－10からここに續く（ここで自己紹介とこれまでの説明がなされる）
2上－6	斬子	羅藝命斬羅成	六么令×2・引・新水令・步步嬌・折桂令・江兒水・雁兒落帶得勝令・僥僥令・收江南・園林好・沽美酒帶太平令・尾聲	南北合套	忙堂惶／謀憂羞（引）	羅成・羅藝・老夫人（秦氏）		銅旗陣		羅藝は靖邊侯（曲海總目提要によれば倒銅旗では唐の臣下となり、羅成の妻となった靖璇妃〔提要は妃とする〕が羅藝に靖邊侯の敕命を屆ける）・引のみ別韻
2上－7	俠救	王婉兒見靖璇飛求救	一江風×4・朝元歌・尾聲		殘燦難	王婉兒・靖璇飛		銅旗陣		1下－9を承ける。曲海總目提要によれば、この展開は鬧花燈・倒銅旗に共通するが、靖璇飛（沙陀國王公主）が登場するのは後者（鬧花燈では花花公主または金鐃公主）
2上－8	郊壇	靖璇飛飛鐃救羅成	粉孩兒・福馬郎・紅芍藥・耍孩兒・會河陽・縷縷金・越恁好・紅綉鞋・尾聲	南北合套？	緊瞬身坤	羅成・王婉兒・老夫人・靖璇飛		銅旗陣		羅成が矢で射られる設定、說唐のものとどちらがオリジナルか
2上－9	定計	楊林定計設武擧	引・四園春・皂羅袍×2		端塵穩君	宇文化及・楊林・靖璇飛		銅旗陣	○	鬧花燈にもこの設定あるが、羅成が父の怒りを買うのは武擧でのこととなっており、靖璇飛ではなく花花公主
2上－10	遇英	羅成途遇李世民李元霸	錦堂春・引・芙蓉普天・普天紅・朱奴銀燈・銀燈照芙蓉・尾		灰馳飛	小秦王・李元霸・李藥師・羅成		銅旗陣		李世民と李元霸登場、蕭銑を討ちに行くと言う。李藥師が參謀。王世充に向かいかけて江都に方向轉換
2上－11	滅計	下雨滅鐵烏筒計	步步嬌・風入松・急三鎗×2・風入松・普天芙蓉・朱奴剔銀燈・尾		表調草	秦瓊・王伯當・齊國遠・尤俊達・孫韜・金勇・蘇定方・張須陀・程咬金・羅成・李元霸・宇文化及		銅旗陣		瓦崗寨で程咬金を王とするという・蘇定方と張須陀登場
2上－12	大考	江都武擧羅成奪狀元	點絳唇・混江龍・油葫蘆・天下樂・哪吒令	北曲套	羅鎖可魔	楊林・張須陀・羅成・蘇定方・程咬金・左傑・秦瓊		銅旗陣		羅成が狀元、程咬金が榜眼、秦瓊が探花。羅成が楊林を刺す。これらの展開は倒銅旗と完全に一致。
2上－13	賺關	羅成賺甘泉關逃走	水底魚・尾犯序・換頭×3・金錢花・尾		支司兒	靖璇飛・羅成・李元霸・秦瓊その他		銅旗陣		靖璇飛と羅成のその後なし。一部のみの切り取り・また金鏞にいると羅成が言う。秦王詞話のパターン
2下－1	收馬	尉遲恭收伏神馬	菊花新・甘州歌×2・撲燈蛾・尾		衣施威／程虹凌欽	尉遲恭		投唐記？		ここから尉遲敬德の話に變わる。羅成の話は尻切れトンボに・菊花新は別韻・神人から鞭を賜ることは口頭でふれられるのみ（原型にはあったか）
2下－2	贈鞍	六丁神贈鞍轡甲冑	點絳唇・縷縷金・駐雲飛×2・尾	入聲韻踏まず	行命運／路途呼	六丁神・尉遲恭		投唐記？		縷縷金が別韻

2下－3	投軍	尉遲恭投劉武周	點絳唇・風入松・引・鎖南枝×3・尾		生勝縱遁人京	范君章・劉百紀・張萬年・宋金剛・劉武周		投唐記？		
2下－4	出師	劉武周出師討唐	出隊子・一江風×2・傾杯玉芙蓉		銳微威／旄暴梟	劉武周・尉遲恭・范君章・劉百紀・張萬年・宋金剛		投唐記？		傾杯玉芙蓉が別韻
2下－5	破關	劉武周破雁門寧武二關	引・一封書・朱奴帶錦纏・尾		驚成／曹髦堯	張永壽・尉遲恭・劉武周・江榮・江華・范君章その他		投唐記？		引が別韻
2下－6	聞警	李元吉聞報逃走	縷縷金・梁州序・節節高×2		命兵風遁	李元吉		投唐記？		報子、西江月の白
2下－7	奪寨	尉遲恭力破八將	新水令・步步嬌・折桂令・江兒水・雁兒落帶得勝令・僥僥令・園林好・沽美酒帶太平令・清江引	南北合套	疆壯降	尉遲恭		投唐記？		
2下－8	驚像	張氏驚看秦瓊像	引・一江風・引・綉帶兒×2・尾		顰亘鏡	柴妻李氏・秦夫人張氏		麒麟閣？	○	この齣は麒麟閣の團圓への伏線か
2下－9	揚兵	尉遲恭率兵前去	引・甘州歌		雄動瞳	尉遲恭		麒麟閣		『綴白裘』6に『麒麟閣』としてあり
2下－10	五報	五探子報尉遲打敗唐將	北粉蝶兒・上小樓・黃龍滾・撲燈蛾・小樓犯・疊字令・尾		豪表哮	徐茂公・秦王		投唐記？		探子の場のパターンにのっとる。紅青白黃黑の探子。尉遲敬德に破れるのは、①屈突通・段志雄・史乃(萬)寶・田留安②齊國遠・李汝珪・薛萬徹・邱行恭③李君羨・楊武威・白士讓・劉宏（弘）基④李玄（缺筆）通・程名振・馬三寶・翟長孫・殷開山⑤向善忠・李神通・邱師利・薛萬均・ト書きが徐勣から徐茂公に變わる
2下－11	圓說	徐茂公說聘秦叔寶	浪淘沙×2・引・風入松×2・急三鎗・風入松・急三鎗・風入松		戎風中／麵雙丈	徐茂公・秦瓊・單雄信・程咬金		麒麟閣？	○	大反山東・三擋楊林に言及・浪淘沙×2が別韻
2下－12	較雄	秦叔寶大戰尉遲敬德	引×3・泣顏回×2・千秋歲×2・越恁好×2・紅綉鞋・尾		水夷勢	秦王・徐茂公・秦叔寶・尉遲恭		麒麟閣？		ト書きが秦叔寶に（秦瓊もあり。前齣のト書きは姓のみ）・程咬金を程知節と呼ぶ・三鞭換兩鐧は相互に打ち合う・寶建德に攻められた羅藝を秦叔寶が救援に行くところで終わるが、續きなし
2下－13	奪槊	尉遲恭保秦王殺單雄信	鬪鵪鶉・紫花兒序・禿廝兒・聖藥王・東原樂・尾	北曲套	搜擻斗	單雄信・秦王・徐茂公・尉遲恭		投唐記？		魏武陵を曹操の墓とする・谷を三人が飛び越すのはここに・尉遲敬德、單雄信を殺してしまう・奪槊の狀況なし
2下－14	相逢	柴夫人迎秦母	引×2・桂枝香・不是路・長拍・尾聲		鈿妍眷年	柴夫人・秦母・秦夫人		麒麟閣？		秦母は尤俊達に助けられる
2下－15	團圓	秦瓊一家團圓	泣顏回・引・節節高		雲勤綸贈／泥墀惠	秦母・秦夫人・秦瓊		麒麟閣？		節節高別韻・ト書きまた秦瓊に・提綱では「麟閣」で、秦瓊・胡敬德・徐勣と排宴官が登場のはず